

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和4年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、平成25年度入学生から実施された高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）を踏まえた試験であった。指導要領では、総合的な言語能力を育成する「国語総合」を共通必修科目とし、高等学校「国語」において指導する内容の共通性を重視している。

共通テストでは、指導要領において育成を目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっており、言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求めることとなっている。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。

「内容・範囲」「分量・程度」「表現・形式」の面から、第1問～第4問それぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

第1問 二つの文章ともに「食べる」ことについて様々な視点から考察した文章である。一つは文学作品を参照したものであり、もう一つは人間に食べられる豚肉の視点から述べられたものである。論理的思考力や文章読解力、また、多様な視点から読み取ったことを踏まえて自分の考えをまとめる力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 漢字・熟語・語彙についての基本的な知識・技能を問うている。

問2 筆者がよだかの思考の展開について説明している傍線部直後の段落の文脈を、的確に読み取る力を問うている。

問3 「よだかの星」を参照した【文章Ⅰ】全体を踏まえて、「食べる」という行為を通して「生」について述べている本文の内容を的確に読み取る力を問うている。

問4 【文章Ⅱ】後半の、「一つ目は」、「二つ目は」という段落の内容を比較し、両者の共通点に着目して、本文の要旨を的確に理解する力を問うている。

問5 「食べる」という行為の過程を説明した【文章Ⅱ】の表現の特色を的確に読み取る力を問うている。

問6 (i) 「食べる」ことについての捉え方の違いについて、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】とを比較、分析し、【文章Ⅰ】の要旨を的確に捉え、より深く思考する力を問うている。

(ii) 本文の内容を【メモ】にまとめるMさんの活動の追体験を通して、二つの文章の内容を整理し「食」や「生」について考察し、多角的なものを見方ができるかどうかを問うている。

第2問 案山子におびえる雀のように、隣家の看板に描かれた男の絵を気にしている「私」の心情を描いた文章である。「私」の視点を中心に、その内面について丁寧に描写されており、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

- 問1 傍線部以前に書かれている「私」の心情についての叙述を丁寧に読み取り、少年に無意識にも近寄ってってしまう「私」の心理的要因を的確に理解する力を問うている。
- 問2 「私」が感じた「厭な痛み」の内容について、「私」と少年とのやりとりやその後の叙述を根拠にして、心情を的確に読み取る力を問うている。
- 問3 「少年」が時間をかけて看板を用意したであろうということに気付いてから、「少年」に対する「私」の感情が変化する様子を、文脈からの的確に読み取る力を問うている。
- 問4 (i) 「少年」を示す表現が変化することに着目し、その変化の背景にある「私」の心情を的確に読み取る力を問うている。
(ii) 前問(i)と同様に、「看板の絵」に対する表現が変化することに着目し、その変化の背景にある「私」の心情を的確に読み取る力を問うている。
- 問5 (i) 本文の内容の理解を深めるために、国語辞典や歳時記と関連させて【ノート】に整理するNさんの活動の追体験を通して、収集した情報を理解、選択し、その情報をもとに本文における「私」の心情を的確に読み取る力を問うている。
(ii) 「私」の看板に対する認識の変化や心情の推移について、国語辞典や歳時記といった他の資料と関連付けて整理をし、的確に読み取る力を問うている。
- 第3問 南北朝時代の歴史物語『増鏡』と鎌倉時代の日記・紀行文『とはずがたり』からの出題。どちらも後深草院が異母妹である前斎宮を慕い彼女へ思いを伝える場面を取り上げている。古文特有の語句が多く用いられており、古文を的確に読み取る力、またその内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であった。
- 問1 本文の読解に必要な基本的な単語・敬語・文法の知識を問うている。
- 問2 傍線部の語句の意味、用法や前後の文脈を根拠に、登場人物の心情を的確に読み取る力を問うている。
- 問3 傍線部直前の後深草院の言葉や傍線部の語句を手掛かりに、後深草院の心情を的確に読み取る力を問うている。
- 問4 (i) 『増鏡』との比較を通して、『とはずがたり』の表現の特色に着目し、そこからわかる【文章Ⅱ】での後深草院の様子を的確に読み取る力を問うている。
(ii) 『増鏡』には見られない二条の内面について、【文章Ⅱ】の内容を構成や展開に即して的確に読み取る力を問うている。
(iii) 歴史物語と日記文学の違いについて話し合いをする活動を通して、古文の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察する力を問うている。
- 第4問 清代の学者・政治家である阮元の文集『擘經室集』から、彼が詠じた詩及びその序文からの出題。「庭園に飛来した蝶」を話題にした文章であり、漢文に用いられる基本的な句法や漢詩の知識、及び漢文を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。
- 問1 漢文特有の語についての基本的な知識を問うている。
- 問2 本文を的確に理解するために必要な訓読のきまりや書き下し文についての基本的な知識・技能を問うている。
- 問3 傍線部に含まれる漢文の基本的な句法や語句の解釈を根拠とし、前後の文脈とあわせて本文を的確に読み取る力を問うている。
- 問4 詩の形式や押韻など、漢詩のきまりに関する基本的な知識を問うている。
- 問5 本文を的確に理解するために必要な基本的な句法の知識を問うている。
- 問6 蝶が現れたり、とまったりした場面について、本文の内容を展開に即して的確に読み取る力を問うている。

問7 【詩】と【序文】から本文の内容を多角的に解釈し、それぞれの内容から筆者の心情を的確に捉える力を問うている。

3 分量・程度

(1) 設問数について

制限時間80分に対して大問は4問で、大問ごとの設問数は第1問が6問、第2問が5問、第3問が4問、第4問が7問であった。全体の解答数は36で、適切であった。また、大問によっては、問の選択肢数を減らすなど、受験者の解答時間に配慮した面も見受けられた。

(2) 難易度について

第1問は、小説の一部を含む文章及び設問中の【メモ】とも、高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当であった。設問では、同一漢字の中で異なる意味をもつものを解答させ、語彙力を問う設問の工夫が見られた。大問全体として、複数の異なる文章に共通する話題について表現する授業を想定した設問など、難易度としては適切であった。

第2問は、本文及び設問中の【ノート】とも、文章量は適切であった。例年出題されてきた語句の意味を問う設問は出題されなかったが、解答する上で基本的な語句の意味の理解を必要とする設問のほか、問5のように、本文の一部について、語句の意味と俳句の解釈を関連付けて理解する設問もあり、難易度としては適切であった。

第3問は、ジャンルは異なるが同一の場面が描かれた複数の本文とともに、古文の学習の場面を想定した会話文が出題され、文章量は適切であった。文法や基本的な単語の知識を活用して解釈することに加え、教師と生徒たちの話し合いの場面を設定した新しい形式の設問もあり、古文の学習成果を見る難易度としては適切であった。

第4問は、漢詩とその序文による出題で、文章量は適切であった。過去に実施されたセンター試験や共通テスト同様、基本的な知識に関する設問や形式の異なる文章から内容や心情を考える設問があり、漢文の学習成果を見る難易度としては適切であった。

全体的には、指導要領や生徒の学習の過程を意識した場面設定を踏まえており、難易度は妥当であった。

4 表現・形式

第1問

〔問6〕二種類の本文を授業で読んだ生徒が、二つの文章に共通する要素である「食べる」ことに着目し、捉え方の違いについて考察しながら自分の考えを整理するために【メモ】を作成するという学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。

(i)(ii)ともに、項目ごとに【メモ】を作成し、それぞれの項目を踏まえて次の項目を作成するという思考の過程を重視した問い方となっており、受験者の日頃の学習活動を踏まえたものであったと考えられる。また、配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第2問

〔問5〕本文の表現に注目して国語辞典や歳時記で調べたことを【ノート】にまとめ、素材文の内容理解を深める学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。

(i)では、国語辞典や歳時記の内容と関連付けながら【ノート】の内容について考えようとした、という表現を用いて、調べた内容を相互に関連付けて考えさせる工夫が見られた。

【ノート】として示された資料中の三種類の矢印記号が表す意味や、矢印を用いたねら

いがややわかりにくい。記号のもつ意味や記号を用いるねらいについて今後検討していただきたい。配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第3問

〔問4〕同じ場面を描いた異なる二つの文章の内容の違いや特徴について、複数の生徒が教師の支援を受けながら対話的に学習を深めていくという設定の問題で、授業において生徒が学習する場面が意識されており、問題作成方針に合致している。

表現や用語も受験者の混乱を招くものではなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

第4問

〔問7〕清の学者・政治家である筆者が、かつて住んでいた庭園での出来事を詠じた漢詩とその序文から、筆者の心情を読み取らせる問題となっている。複数の文章の内容を読み比べ、必要な情報を精査・解釈する力が問われており、問題作成方針に合致している。

表現や用語も受験者の混乱を招くものではなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

5 ま と め（総括的な評価）

本年度も知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題が、生徒の学習の過程が意識された場面設定の中でバランスよく出題されたことを評価する。今後、高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに妥当な問題が作成され、また、生徒の言語能力を育成する高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して、意見・要望を以下に示す。

- (1) 「国語総合」の枠の中で指導要領に沿った問題作成がなされていた。学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問が多く出題されており、言語活動の過程を踏まえた場面や複数の題材を統合して考察する場面の設定により、平素の学習活動を通して身に付けた力を評価することのできる設問となっている点は評価される。
- (2) いずれの大問においても、本文が比較的平易で適量であり、時間内でテキストの細部を検討したり全体の要旨を把握したりして読み、設問の意図を捉えて選択肢を吟味することが可能であったと思われる。本文と関連付けて考察することを求める【メモ】や【ノート】も量、難易度とも適切であった。次年度以降も同様の配慮により、受験者が十分に思考し、判断する時間が確保されることを求めたい。
- (3) 共通テストにおいては、生徒が「どのように学ぶか」を重視していることが十分に感じられるものであった。「食べること」をテーマとした複数の素材文によって「食べること」の意味を探ることをねらいとした設問の工夫、本文の理解を深めるために国語辞典や歳時記を用いて内容を【ノート】に整理するという言語活動の設定、同一の場面を異なる視点で描いた古文の比較により書き手の意図に迫るといった学習課題など、授業改善の視点において大いに示唆に富むものであった。
- (4) 近代以降の文章、古典とも、高校生が読むのにふさわしい多様な題材が用いられている。出題に当たっては、素材文の魅力や価値を十分に生かし、受験者が文章から得た情報を多面的・多角的な視点から解釈する力を発揮することのできる設問が、すべての大問においてバランスよく出題されるよう工夫していただきたい。また、今後も題材として実用的な文章を含めた多様な文章を活用した出題を期待したい。共通テストにおける出題が国語科における授業改善を促し、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を生徒に育成することに資するものとなるよう期待する。